

市制75周年・平成27年度(2015年度)秋季特別展

絵図っておもしろい

—国絵図と村絵図—

会期 平成27年(2015年)10月3日(土)～11月29日(日)



行基菩薩説大日本国図
(尼崎市教育委員会蔵)

日本列島を描いた絵図は、年号がわかる現存しているものでは嘉元3年(1305)の図が最古です。鎌倉時代から江戸時代初期までの日本図は行基図と呼ばれるタイプのものが多く残されており、俵形を連ねて日本列島を形作った姿をしています。安土桃山時代ごろより、西洋から世界図や測量法などが伝わり、日本図の描かれ方が変わり、次第に正確な絵図が描かれるようになりました。写真の日本図は寛永末から慶安4年(1651)頃に描かれたと考えられています。

今回の展示では、江戸時代に描かれた様々な日本図や摂津国図、吹田の村絵図や神崎川流域の悪水井路絵図や開発図などの村絵図を一堂に展覧します。(当館学芸員 池田直子)

摂津国絵図に描かれた吹田

吹田市は、昔の摂津国島下郡・豊島郡にまたがる位置に所在しています。今回の秋季特別展では、3つの摂津国絵図を紹介します。一つ目は西宮市立郷土資料館所蔵「慶長十年摂津国絵図」（以下、西宮本国絵図とする）、二つ目は尼崎市教育委員会所蔵「摂津国絵図」（以下、尼崎本国絵図とする）、三つ目は吹田村の仙洞御料の庄屋を務めた西尾家所蔵「摂津国絵図」（以下、西尾家本国絵図とする）です。

江戸幕府を開いた徳川家康は、慶長10年（1605）全国の大名に国絵図を提出させました。江戸幕府はその後も正保元年（1644）、元禄10年（1697）、天保6年（1835）に国絵図を提出させています。幕府は提出された国絵図をもとに日

本全図の編集を行いました。

西宮本国絵図は、慶長10年（1605）という年紀があり、最初の国絵図徴収の際に制作されたものの写しです。慶長の国絵図は、肥前国2種、肥後国、筑前国、長門国、周防国、摂津国、越前国の8点しか残されていません。西宮本国絵図は郡ごとに村名が色分けされています。

吹田地域の地名は、（山田）上村、（山田）中村、山田村、（山田）下村、山田市場村、山田市場、吉志部小路村、寺内、東村、南吉志部村、西寺村、吹田村、河面村、奥村、西庄村、片山村、垂水村、宮田村、榎塚村がみられ、まだ寛永14年（1637）に山田小川からの分村を公認された山田別所村はみられません。河面、奥、西庄は吹田村を構



「慶長十年摂津国絵図」（西宮市立郷土資料館蔵）



「摂津国絵図」の部分（尼崎市教育委員会蔵）

成する集落であります。村として表記されているのは、近世村落形成の過渡期であることを示していると思われます。

次に、尼崎本国絵図をみてみましょう。尼崎本国絵図は元和3年（1617）頃ごろの摂津国を描いたと考えられています。西宮本と同じく郡ごとに村名が色分けされています。

吹田地域では、（山田）上村、（山田）中村、山田村、（山田）下村、山田市場、^{（吉志部）}岸へ小路村、^{（吉志部）}寺内、東村、^{（佐井寺）}岸へ南村、西寺村、西庄、奥村、川面村、吹田村、片山村、^{（垂水）}たるミ村、広芝村、宮田村、榎坂村の名がみえます。村名は短冊型で示されているのが、他の絵図と違うところです。西宮本と尼崎本に記された宮田村は現在はない地名ですが、榎坂村・吹田街道のすぐ北にあたるところから、現・^{かんじんぐう}感神宮（江坂町3丁目）の付近にあった村かと思われます。

西尾家本国絵図は西尾家に残された史料の一つです。摂津国から河内国北部にかけて描かれています。村名は小判型で示されていますが、代官所・預り所ごとに村名が色分けされているのが、他の2つと違う点です。

よくみると、山田村と吉志部村の村々の位置が入り交じっていたり、垂水・下垂水が豊島郡ではなく、島下郡に入っていたりするなど不正

確で、少なくとも吹田で描かれたものではないと思われます。

西尾家本国絵図にみえる吹田地域の地名は、（山田）上村、（山田）下村、山田市場村、山田村、（山田）中村、^{（佐井寺）}才寺村、吉志部村、七尾村、小路村、吹田村、吹田^{りゅうさく}流作、片山村、垂水、下垂水、寺田村です。ここでは、榎坂村の名が記されず、榎坂郷を構成する一つである寺田村だけが記されています。

神崎川筋に吹田村^{りゅうさく}流作場、味舌村流作場や、武庫川下流に西新田、鳴尾新田などがみえ、江戸時代後期の状態を示していると思われます。流作場とは堤外に開発された新田のことです。延享元年（1744）9月末、巡検使に提出した控書には流作場の高が55石3斗8升6合とあり、西尾家本国絵図に描かれている「高五十五石余吹田流作」と一致します。

江戸時代中期以後になると木版刷りの日本図や巡礼図など様々な絵図が普及し、庶民も絵図を楽しめるようになりました。西尾家本国絵図は木版刷りではありませんが、西尾家当主が、国絵図に興味を持ち、描かせたものかもしれません。

ここでは、主に吹田の地名に注目しましたが、3つの国絵図を見比べて、違いを楽しんでみてください。（当館学芸員 池田直子）



摂津国絵図（西尾家蔵）

神崎川開発の絵図

旧吹田村に残された絵図で多いのは、第一に、農地の排水路を示した悪水井路^{いじ}絵図、第二に神崎川の堤外の開発絵図です。悪水井路絵図については博物館だより第 14 号で紹介されていますので、ここでは神崎川堤外の開発絵図を紹介します。

江戸時代中期になると淀川下流域に土砂の堆積が進み、神崎川筋などで付洲つきすができました。こうした付洲は治水の面からは氾濫はんらんの被害を大きくするという一方で、開発を規制する時期もありましたが、むしろ、付洲を新田として開発を進めるようになっていきます。河川などの堤外りゅうさくばに開発された新田を流作場ともいい、流作場は年貢増徴政策の一つとして推進され、開発が進められました。流作場は増水などによって水害を受けやすい耕作地で、村高には含まれず、毎年作柄けみを検見して年貢が課せられました。

ここでは、神崎川付洲開発の絵図として、「摂州神崎川筋吹田村よしち葭地開発絵図」（宝永7年（1710）、以下「宝永外島絵図」とする。）、「摂州神崎川筋吹田村外島之内流作願絵図」（正徳5年（1715）、以下「正徳外島絵図」とする。）、神崎川



「摂州神崎川筋吹田村葭地開発絵図」(当館蔵)
宝永7年(1710)

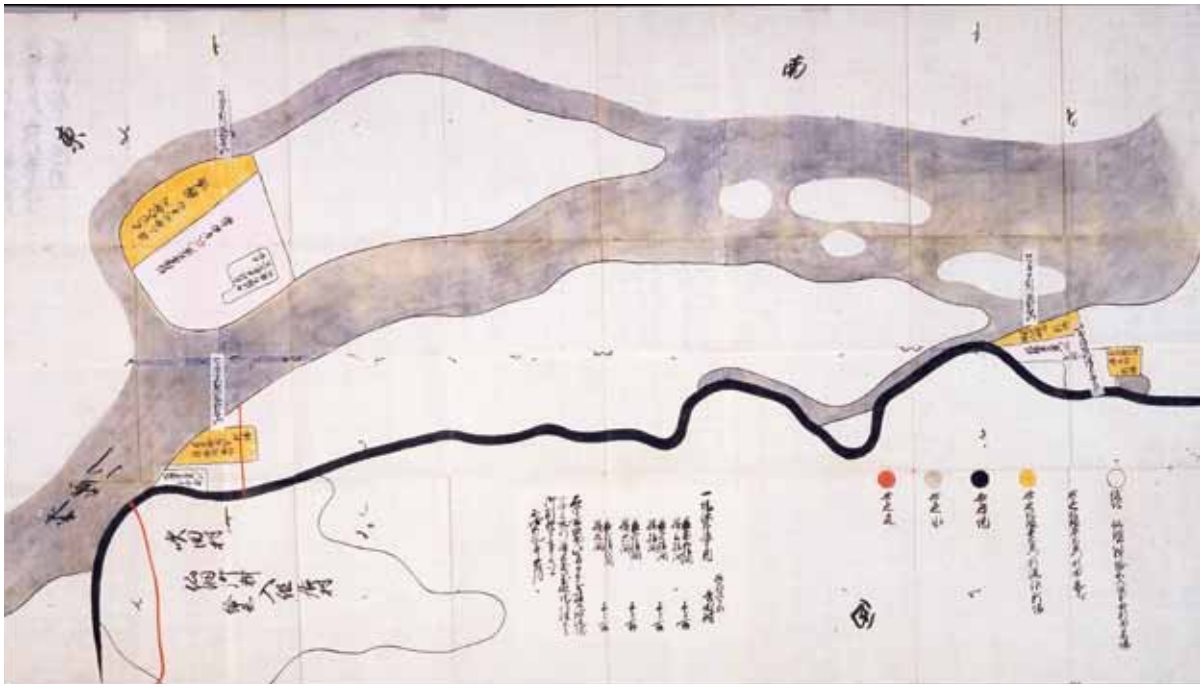
「筋外島絵図」（寛政2年（1789）、以下「寛政外島絵図」とする）の3点を紹介します。

いずれの絵図も、南を上にして、堤を太い黒線で表しており、堤外の神崎川の様子が描かれています。吹田村は柘植領、竹中領、仙洞御料の三領主の入り組み支配地で、その領地が複雑に入り組んでいました。これらの絵図は開発を願い出た新田、もしくは、開発された新田が描かれており、どの領地の支配下にあったのかも明確に記されています。

まず、最初の宝永外島絵図は、柘植領の農民が神崎川の堤外の葭地開発を願い出た絵図です。黄色部分は税のかからない高外で、白色部分は税のかかる高内で柘植領と竹中領を表しています。このとき開発を願い出た場所は地色のままで、貼り紙がつけられています。ピンク色は仙洞御料の開発地で5年以前に開発されたとあります。この絵図に描かれた地域は、吹田村西部になり、現在のほぼ南吹田地区にあたります。

次に、正徳外島絵図も開発を願い出た絵図ですが、田田村東部にあたります。左上に描かれているのは、今の東御旅町・西御旅町にあたる地域です。手前の堤に添った付洲の部分はほぼ現在の中の島町地区にあたります。黄色部分が柘植領の開発を願い出た部分です。4箇所あり
このそとじまのみずゆきのさわりあいみえずそうろう
ますが、いずれも「此外島水行障不相見候」とあり、開発場所が、水流の差し障りにならないことを貼り紙しています。裏の貼り紙にも
みずゆきさわりまじくそうろうあいだりゅうさくつかまつりそうろうふんはかってしだい
「水行障間敷候間流作仕候分ハ勝手次第」とあり、水流に差し障りがないならば流作をするのはかまわないとの記述があります。

最後に、寛政外島絵図は宝永5年（1708）の絵図を寛政2年（1789）に写したものです。写されたのは一番新しいですが、内容はこの中で一番古い状態を示しています。この絵図は宝永外島絵図と正徳外島絵図の両方の部分が描かれています。ピンク色部分は仙洞御料の新田7箇



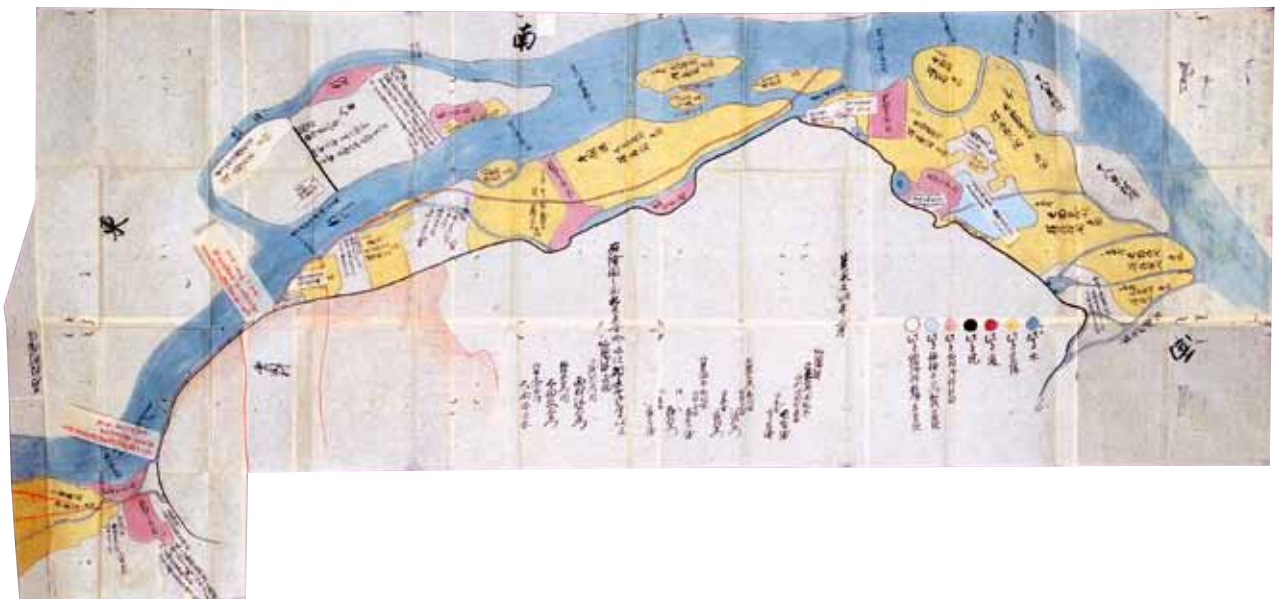
「摂州神崎川筋吹田村外島之内流作願絵図」(当館蔵)
正徳5年(1715)

所です。宝永外島絵図では、該当する部分に「戊辰年開発」とあり、これら7箇所の新田は宝永3年(1706)に開発されたと思われます。宝永元年(1704)に大和川の付け替えが行われ、翌2年(1705)には大和川の旧川床の新田開発も行われていました。裏面の貼り紙によれば、大坂町奉行が川筋外の見分・吟味を行い絵図の提出を命じたとあります。外島の流作場の様子と神崎川の水流、悪水井路などの状態を詳しく調べたのでしょう。所々川幅の記述があるのは、外

島により川が細くなっておらず、水流に滞りがないことを示すためと考えられます。

現在は護岸工事によって、川筋はほとんど変化しませんが、江戸時代以前は川の氾濫や付け替えによって流れが変わったり、付洲を開発することで、景観は大きく変化したものと思われます。古い絵図によって、江戸時代の吹田の景観や、当時の村人が一生懸命新田を開発していく様子をたどることができます。

(当館学芸員 池田直子)



「神崎川筋外島絵図」(当館蔵) 寛政2年(1789)



吉志部神社は、岸部地区に所在しており、当館の展示のみならず、文化財の調査など、密接な関わりがあります。今回は、様々なかたちでたいへんお世話になっている吉志部神社の奥田正夫宮司に、神社のことや、神社周辺のことなどについて話をうかがいました。



中牧館長：まずは、吉志部神社の成り立ちについてお話しいただけますか。もともと、岸部村の氏神のような存在だったのでしょうか。

奥田宮司：言い伝えですが、崇神天皇^{すじん}のころ、大神宮と称して造立され、ずっと守られていたそうです。その後、応仁の乱で焼失し、慶長のころに立て直されました。慶長の頃は間違いなく氏神だったと思いますが、応仁の乱前後は記録が残っていないので、わかりませんね。豪族のお墓だったという話もあるそうです。

中牧館長：平成20年(2008)に本殿が焼失した際に行われた発掘で、慶長以前の遺構が見つかりましたね。

奥田宮司：室町時代頃のもので、同じ礎石が使用されていたそうですね。炭で線を引いた跡が残っていたようです。

中牧館長：吉志部神社では、毎年秋に「どんじ祭り」というお祭りをされていますよね。当館でも、お祭りを紹介する展示がありますので、お互い深い関係にあります。

奥田宮司：江戸中期頃の資料に、どんじ祭りの記録が残っています。ただ、いつから行われていたのかは分かりません。今は、各奉賛会の「ど

んじ保存会」の皆さんが、早くから準備をして、10月17日の秋祭の当日午前中に、朝御食・昼御食・晩御食と神様に奉納していますが、戦前までは、真夜中に順番に奉納していました。なぜ三ヶ村で行なわれるかはわかりませんが、吉志部の村々が発展し、開拓地が広がり、収穫物も増えたため、それぞれの村で開催しようという話にもなったのかなとも思います。もしくは、お祭りを通して、村々が競い合っていたのかもしれない。

中牧館長：展示を見ると、お供え物を神社へ運ぶという大切な役割を女の子に持たせていて、ユニークだなと思います。

奥田宮司：稚児さんですね。はっきりとした理由はわかりませんが、釈迦ヶ池に大蛇が出て、退治するという伝説があり、退治される前は、女の子が人身御供に出されていたという話があったそうです。その言い伝えを受けて、女の子が「どんじ」奉納の際に選ばれたのではないか、という話もあります。治水のひとつだったんでしょうね。

中牧館長：釈迦ヶ池は、昔は「大池」と呼ばれていましたね。

奥田宮司：行基が開拓して造ったという伝承が残されています。行基は、日本に土木事業を広めた人で、全国各地で工事をしていますよね。このような大きな池を造るにも相当な技術と権力がないとできないと思います。

また、田植えの時期になりますと、池の水門を開けて水を流す様子を見ることができますが、角度や水圧で、勝手に流れるんですよ。参道を通して、水路が広がっていて、角度だけで岸边駅の向こうの田んぼまで流れるんですよ。それに、水の勢いで、どの地区の田んぼまで水を流しているのわかります。溝の高さも計算されて、設計されたのだと思います。

中牧館長：参道というのは、現在の岸部郵便局北側の、旧亀岡街道の灯籠があるところからこの神社に続く道ですね。昔の人々は、ここの参道を通り、お参りに来るというかたちだったのでしょうか。

奥田宮司：私の家族は、昔は神社の近くには住ん

でおらず、参道の入り口付近に住んでいました。私の曾祖父は、いつも時間きっかりに神社に出勤していました。ですので、「宮司さんが参道を通ったから、8時になったんだな」と、村の人々は思っていたそうです。その後、私の父である前宮司の代になりますと、働きながら勤めていたもので、神事など用のある時のみ出ていましたが、平成5年(1993)に、重要文化財に指定された時から、両親が神社の近くに移り住んだということです。

中牧館長：宮司さんが日常的に参道を使われていたんですね。この参道を囲む紫金山は、鎮守の森のようなたたずまいだと思いますが。

奥田宮司：そうですね。ここは少し小高い山になっていて、池もあって、木々も豊かなためか静かなので、非常に落ち着く場所です。木がこれだけ立っていると音を遮断するんだな、たいしたものだなと思います。ただ、残念ながら、神社の後ろの木々は、火災で燃えてしまいました。しかし、何本かは生き残って、再生しつつあります。大変な回復力だなと思いますね。

それから、夏の夕方3時から4時ごろにかけて、風が通るんですよ。ざざざっと風が神社周辺を回るんです。この風や音はとても落ち着きます。でも、やっぱり焼けた部分だけは風が回ってこないんですよ。前はきれいに風がささやくように渡っていたんですけどね。ただ、最近、少しずつ燃える前の状態には戻りつつありますね。

中牧館長：紫金山には、たくさんの野鳥が羽を休め、木々のほかにも、多種の野草が数多くみられますね。また、この山のツツジは紫に見えるとか。

奥田宮司：コバノミツバツツジですね。私たちはよく、山ツツジと呼んでいます。参道と旧亀岡街道が重なる場所に、大正15年(1926)に造られた道標が立っていますが、そこに「この神社はヤマツツジが有名だ」と記されているんです。この神社はお産の神様で、ヤマツツジがいいですよ。そのころは、自然のツツジがたくさん残っていたと思いますが、一時期、すべて枯れてしまうんですね。そこで、前の宮司が、奉賛会や村の方々に復活させませんかと声を掛け、皆で協力してお金を集め、植林したんです。現在は、公園のほうに植林したツツジ残っていますね。この残ったツツジの付近には桜の木もあって、春には桜が満開になって、そのあとツツジが咲いていました。でも、

昨年から、天候のせいか両方咲くようになりました。だから、とても綺麗ですが、見ることのできる期間が短くなってしまって(笑)。今は、春祭りの前に桜が咲いて、祭りの最中にツツジが咲くんです。遠くからも見に来る人が増えましたね。



紫金山公園に咲くコバノミツバツツジと桜

(撮影：橋本一男)

中牧館長：自然観察をする人々にとっても聖地のような場所となっていますね。

奥田宮司：なかなか無い場所なのではないかなと思います。また、周辺も整備されて、山に入りやすくなりましたね。昔は暗くてうっそうとした森でした。畏れ^{おそ}という意味では、それはそれで意味があったと思います。

中牧館長：縄文からはじまる日本の原風景の縮図が、ここには残されていると思います。それは、吹田の原風景でもあり、市民にとっても、憩いの場としての役割は大きいと思います。

また、周辺には旧中西家や道標などもあるので、これらを上手に演出して、このすばらしい立地を市民に知ってもらって、利用してもらえるような仕掛けを、博物館でもできればいいなと思います。

奥田宮司：そうですね。吹田は開発が進んでしまって、自然もなかなか残っておりませんので、このような形で、守られているのは、貴重な遺産だと思っています。

さらに、神社付近が整備されたことで、たくさんの方がお参りに来られるようになりました。皆さんが守ってくださって、ここまできているので、このまま続いていけばいいなと思います。

中牧館長：今後が楽しみです。今日はいろいろなお話、ありがとうございました。

(2015年8月5日)

秋季特別展「絵図っておもしろい ―国絵図と村絵図―」 関連イベント

■オープニングイベント

場所：2階 講座室 定員：120名（先着順）

10月3日（土）午後1時～1時50分

開会式・展示解説

10月3日（土）午後2時～3時30分

講演会

「日本地図のあゆみ―行基図から伊能図まで―」

講師：神戸市立小磯記念美術館

学芸担当課長 三好唯義氏

■講演会

場所：2階 講座室 定員：120名（先着順）

10月10日（土）午後2時～3時30分

「神崎川絵図から見た江戸幕府開発・治水政策の変化」

講師：大阪大学教授 村田路人氏

10月31日（土）午後2時～3時30分

「絵図から読む江戸時代」

講師：京都府立大学准教授 上杉和央氏

11月14日（土）午後2時～3時30分

「絵図から読む近代」

講師：同志社女子大学教授 天野太郎氏

■歴史講座

場所：2階 講座室 定員：120名（先着順）

10月11日（日）午後2時～3時30分

「佐井寺の歴史と美術」

講師：当館学芸員 市村茉莉

11月22日（日）午後2時～3時30分

「吉田初三郎によって描かれた吹田鳥瞰図」

講師：当館学芸員 五月女賢司

11月29日（日）午後2時～3時30分

「中・近世の神崎川流域の中洲絵図」

講師：当館学芸員 池田直子

■ギャラリートーク

場所：特別展示室 ＊観覧料が必要です。

10月25日（日）午後2時～3時

講師：当館館長 中牧弘允

■コンサート

場所：2階 講座室 定員：120名（先着順）

10月4日（日）午後1時30分～3時

「秋の紫金山コンサート」

演奏：紫金山ポップスオーケストラ

■体験講座 いずれも要申込

場所：2階 講座室

10月18日（日）午後2時～4時

「吹田駅の鳥瞰図を描いてみよう」

講師：青山大介氏

定員：20名（多数抽選）

申込締切：10月7日（水）必着。

10月24日（土）午後2時～4時

浮世絵刷り体験「隈取りを刷ってみよう」

講師：上方浮世絵館

定員：20名（多数抽選）

申込締切：10月13日（火）必着。

11月1日（日）午後2時～4時

「和本綴じ体験」

講師：工房レストア

定員：20名（多数抽選）

申込締切：10月20日（火）必着。

■現地見学会 要申込

10月17日（土）午後1時～5時

「吹田街道を歩く」

吹田の渡しから垂水神社まで歩きます。

集合場所：浜屋敷

解散場所：垂水神社

定員：30名（多数抽選）

申込締切：10月7日（水）必着。

■クイズラリー

場所：展示室 ＊観覧料が必要です。

11月22日（日）午前10時～午後4時

博物館ボランティア有志の会（景品あり、随時受付）

イベントの申し込み方法

はがきかファックスにイベント名・日時・参加者全員の郵便番号・住所・名前（ふりがな）・年齢・電話番号を書いて博物館へ。

問い合わせ：博物館（〒564-0001 岸部北4-10-1
TEL 6338-5500 FAX 6338-9886）